新潟 防災ジャーナル
安全立県宣言

＜第20号＞

(財)新潟県中越大震災復興基金「震災の記憶」収集・保全事業の一環として発行されています。

社団法人 中越防災安全推進機構
〒940－0062
長岡市大手通2丁目2番地6
TEL・FAX0258(36)8141

どんどん焼き

森光集落恒例の「どんどん焼き」。住民らが、するめやもちを焼いた＝1月10日、長岡市小国町森光

若い力とともに

ルポ・小国町森光

新大生と連携、清酒開発

一面の銀世界となった長岡市小国町森光集落。1月10日、降りしきる雪の中、恒例の「どんどん焼き」（さいのかみ）の赤い炎が空高く上がった。

「ほれ、するめ焼げ」「まだ早いよ」―。朗らかな声が響き渡る住民の輪には、新潟大農学部の学生の姿もあった。

どんどん焼きが終わると、公民館で飲み会。住民と学生が一緒に雑煮を食べ、日本酒「もりひかり」を酌み交わして、冷え切った体を温めた。「若い子がいると元気になるね」。住民たちがほほ笑んだ。

◇　◇

森光集落は、約10年前から新大農学部と連携して集落活性化へ活動計画を作り、実践してきた。「もりひかり」の共同開発のほか、同じ名のブランド米の作付けや販売、都市部との交流の場として田植えや山菜採りツアーなどもしている。

活動を引っ張るのは「森光担い手生産組合」。周辺地域に先駆けて1994年に設立され、今では集落の7割の農地を担う。結成のきっかけは、集落の過疎高齢化だった。組合メンバーの小島康市さん(57)は「このまま人が減ると、農地の担い手もいなくなる。農業の衰退は、集落の衰退になると思った」と話す。集落は現在、57世帯189人。組合結成から15年間で約50人減った。

コメの直売などが軌道に乗り始めた矢先の2004年、中越地震に遭った。全壊8世帯を含め全戸が被害を受けた。

しかし住民たちは逆境をバネに、県中越大震災復興基金などの支援施策を積極的に活用。県外では「被災の時はお世話になりました」とアピールしながら、支援してくれた人との縁を生かして顧客を増やした。

若い担い手も育っている。コンビニエンスストアの店長だった小島勝弘さん(42)が06年、唯一の専従職員として働き出した。農業を知らなかった勝弘さんは、組合員の指導を受けて、組合の田んぼすべての水管理ができるようになった。勝弘さんは「天候などすぐ状況が変わる厳しい仕事。農業は嫌いだったけれど、考えが変わった」とやりがいを感じている。

◇　◇

新大との連携や若手の参画。活路を見いだした森光では、ほかの山間地のように被災で集落を離れる人はいなかった。

2年前には国の農山漁村における地域づくり表彰で農林水産大臣賞を受賞。ブランド米「もりひかり」は口コミでファンを増やし、昨年は販売を始めた02年の2倍以上の27トンが生産され、1500万円の利益を上げた。

グリーンツーリズムも順調で、山菜採りツアーには首都圏などから70人が集まった年もあり、メンバーから「多すぎるぐらい」とうれしい悲鳴も漏れた。

「ことしは、山菜のきんぴらなどの総菜を販売したい」と康市さん。組合メンバーは、事業を多角化し、もっと多くの若者や元気な「母ちゃん」たちの仕事を増やそうと意気込んでいる。

乾杯　また乾杯

新潟大と森光集落などが共同開発した酒「もりひかり」を酌み交わす新大生らと森光担い手生産組合の小島勝弘さん（右）＝1月10日、長岡市小国町森光

活動の中核　担い手組合

森光の経験　発信を

現状と課題を聞く

伊藤忠雄・新大農学部教授

復興モデルの可能性

中越地震と中越沖地震が、過疎高齢化や離農に拍車を掛けたといわれる中山間地。その中でも、長岡市小国町の森光集落は被災後もムラを去る人はなく、耕作放棄が進むこともなかった。約10年前から同集落と連携してきた新潟大災害復興科学センター長代理の伊藤忠雄・農学部教授に、現状と課題などを聞いた。

―震災で疲弊する集落がある一方で、森光の取り組みは着実に進んでいるようですが。

「震災以前から集落の行く末を考え、方向性を定めてきたことが大きな要因だろう。地震の被害にうろたえず、復興基金などの支援策を使いながら、磨きを掛けている。地震後に急に伸びたわけではない。集落の活性化を模索し続けたことが、『復興力』というか総合力を養ったのだと思う」

―新大は森光の地域づくりに、どのように協力してきたのですか。

「農業経営から農村生活、都市交流、地元資源の開発まで課題が幅広いので、農学部全専門家の知見を生かしてきた。大学にとっても、中山間地の実情を知ると同時に、自分たちの研究を実際にどう生かすかを学べる、すごくいい現場だ」

―森光のような中山間集落の活性化はどうあるべきでしょうか。

「森光では大学の提案もヒントになっただろうが、ベースに住民の強い思いがある。役員の男性以外に、女性やお年寄りグループも積極的にかかわってきた。地震で戸数が減った集落も多いが、まだ遅くはない。自分たちのよすがになるものを考え、独自性や特産を生かした活性化策を編み出してほしい」

―森光集落の例を被災地全体の復興につなげられませんか。

「森光がまだ特別になっている面があるかもしれない。森光の事例を文書などで情報発信することが課題だ。ほかの地域が『それなら、こっちはこうやろう』と思えるように、森光の経験を被災地全体に広げ、普遍化する。『新潟方式』というような復興モデルの確立にもつながると思う」

体として取り組んできた。集落でいただく食事はどれも驚くほどうまく、自然は豊か。宝物がいっぱいある。まずそれを指摘し、地元の人も価値を見直すようになった。その上で棚田米や酒造りなどに積極的にかかわってきた集落も多いが、まだ遅くはない。自分たちのよすがになるものを考え、独自性や特産を生かした活性化策を編み出してほしい」

―森光集落の例を被災地全体の復興につなげられませんか。

「森光がまだ特別になっている面があるかもしれない。森光の事例を文書などで情報発信することが課題だ。ほかの地域が『それなら、こっちはこうやろう』と思えるように、森光の経験を被災地全体に広げ、普遍化する。『新潟方式』というような復興モデルの確立にもつながると思う」

「他地域の参考になるよう森光集落の経験を情報発信する必要がある」と語る伊藤忠雄・新潟大農学部教授＝新潟市西区の同大

復興通信

近年、女性の躍進が目覚ましい。高齢化社会、女性の社会進出、さまざまな場面において、男性社会からの転換が具現化してきたと言える。中越地震からの復興の局面においても同様で、地域住民、支援者共に、女性がもたらしてきた影響は、計り知れないほど大きい▼「中越の女性のパワーで、女性を元気にしたい」。震災から5年を迎えた昨年、〝女性〟による一つのネットワークが産声を上げた。「プロジェクト結（ゆい）」だ。中越各地で活動を進めている女性の地域復興支援員有志を中心に、現在7団体から10人ほどが参加。月に一度の程度集まりを持ち、和気あいあいとした雰囲気の中、情報交換、意見交換を進めている▼「子育て世代のお母さんの集まりはあるけれど、子育てをひと段落したお母さんたちのつながりがあまりないように思うんです。そういったお母さんたちの橋渡しとなる〝地域の伝言板〟のようなことを進めたい。結の場のつながりから、そういったものを育てていければ」と思いを語ったのは、メンバーの一人、財団法人山の暮らし再生機構地域復興支援センター栃尾サテライトに勤務する多田文子さん。「結」の集まりに細かいルールはない。メンバーそれぞれが、日々活動する中から自由にアイデアや悩みを持ち寄り、それを皆で考え、また共有する▼〝結（ゆい）〟という名にも表しているように、つながりによる助け合いの場となっている様子だ。先日、結として初めてとなるイベントへの参加が決まった。3月6日、7日に新潟ふるさと村で行われる、「震災復興中越まるごとじまんいち」へのブース出店だ。料理やものづくり、また手しごと体験など、女性の視点から中越復興の情報発信をプロデュースする。開催当日に向け、忙しく準備を進めているところだ▼「女性の視点でお互い伝える、伝え合う。話し合いの機会がこれまでは意外なほど少なかった。中越の女性のネットワークを通じて、どんどんつながりをつくっていきたい。こういう場が出来て、いろんなことが進んでいくと思います」と語ったのは、メンバーの一人、多世代交流館にな二ーナの馬場裕子さん。震災からの復興を機に生まれた、中越発女性ネットワーク〝プロジェクト結〟による今後の活動に期待したい。3月6、7日の震災復興中越まるごとじまんいち、結ブースのアドレス、〝http://blog.canpan.info/yui/

1月初旬、「結」のメンバーは、出店する新潟ふるさと村を下見。「さあ、がんばろう」とファイト満々になった